

講演会「後鳥羽天皇の書」

令和元年 6 月 16 日（日）
京都国立博物館 学芸部美術室長
羽田 聡 氏



皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました京都国立博物館の羽田と申します。

我々が普段使っている文字の役割は、「読む」、あるいは「見る」の二つ考えられまして、今日は、造形美としての文字を文献や作品から見てみようと思います。

後鳥羽天皇の作品は、和歌、日記、消息類の三つに分かれます。建久 9（1198）年 8 月以後、熊野詣の際に詠まれた和歌は「熊野懷紙」と呼ばれ、後鳥羽天皇の宸筆が 5 枚あります。後鳥羽天皇の字は、非常に墨色が濃く、起筆が力強く、線の強弱を使い分けているという特徴があります。後鳥羽天皇の日記に残されている文字も、この 3 つの特徴は当てはまります。消息類は、東山御文庫蔵の「後鳥羽天皇宸翰事書」と、水無瀬神宮蔵の国宝「後鳥羽天皇宸翰御手印置文」があります。置文は後鳥羽天皇の絶筆で、暦仁 2（1239）年 2 月 9 日に書かれています。そばに仕えていた水無瀬親成の土地の安堵を自らの手で書き記し、文書の効力が確かなものとなるように朱の御手印を押しています。後鳥羽天皇は承久の乱における敗者というイメージがあると思いますが、自分に仕えた近臣の恩に報いようとしたため置文を見ると、後鳥羽天皇は、君臣の道に対してしっかりとした考えを持っていたのではないかと考えています。こうした書の特色を踏まえたうえで、天皇と書はどういう関わりがあるのかを見てまいります。

後鳥羽天皇の文字については、個人的には歳を重ねていくに従って洗練されてきているという印象を持ちます。他の天皇の例では、江戸時代の桜町天皇の文字が残っています。桜町天皇が即位する前の 12 歳の時、享保 16（1731）年に行われた歌会で詠んだ和歌の文字は、非常に大きな字粒で幼さが残る字ですが、寛延 2（1749）年、30 歳の時に弟に宛てた手紙の筆跡は、大分進歩が見られます。昔の人にとって、特に天皇にとっては、歌がうまく詠める、字がうまく書ける、楽器がうまく弾けることが非常に重要です。先ほどの桜町天皇のめざましい進歩の背景には、日々の弛まぬ鍛練があったわけです。

「手習始」という出来事が天皇と書との関わりの始まりです。『後深草天皇宸記』の建治 2（1276）年の記事に、能書として有名な伏見天皇の手習始に関する記事があります。伏見天皇が 12 歳の時、手習始が行われ、三蹟の一人として名高い藤原行成の書が手本として選ばれました。天皇の手習始に関する史料が残っているのは、堀川天皇から始まって崇光天皇まで、平安時代から南北朝時代まで 8 名の天皇です。その方たちがどの手本を用いたのかというのを見てまいりますと、例えば、堀川天皇は小野道風の筆跡を手本とし、高倉天皇と後宇多天皇は藤原忠通を手本とし、伏見天皇は、先ほど藤原行成と出てまいりましたが、『経俊卿記』によると小野道風を手本としたとも書かれています。崇光天皇は、小野道風を手本にしています。日本の書の流れの中で小野道風、藤原行成は、藤原佐理とともに、和様の書の大成者として三蹟に数えられます。藤原忠通は、三蹟により大成された和様をさらに展開させた人物です。いずれにせよ、天皇が手習始をするにあたって、古の能書、

中で文献上一番最初の事例です。藤原隆信の作品は他にも、承安年間におこなわれた儀式の絵を描いた「承安五節絵」や、「法然上人像」が記録・伝承として残っています。さらに、神護寺に伝わる「伝平重盛像」、「伝源頼朝像」などが『神護寺略記』に藤原隆信が描いたものであると記されています。それだけ伝説的な画家であったということがわかります。

隆信の子が、国宝「後鳥羽上皇像」を描いたと考えられる藤原信実です。儀式などを記した「中殿御会図」や「隨身庭騎絵巻」も信実が描いたといわれています。後鳥羽院の肖像画と似たようなタッチで描かれているところがあり重要な作品です。文献上で確認できる信実の作品には、「水無瀬殿の四季の絵」、「新日吉小五月図」があります。歌人の姿を描いたという記録も残っていて、歌仙絵の中でも優れたものといわれる「佐竹本三十六歌仙絵」や、「柿本人麻呂像」、国宝「北野天神縁起絵巻」も藤原信実筆という伝承が残っています。鎌倉時代の優れた作品なら信実筆だろうという鑑定がされてきた歴史があり、それだけ信実は当時、重要な作家であったといえます。

さらに信実の曾孫の藤原為信に関する記録や作品も残っています。三の丸尚蔵館蔵の「天子摂関御影」のうち天皇を描いた一巻は、為信が手掛けたと考えられています。また賀茂祭の様子を記録した「文永賀茂草子」は、記録画も手掛けていたことがわかる作品です。天皇の肖像画ですと、法住寺に伝わる後白河法皇彫像の胎内に後白河法皇を描いた画像が折り畳まれて入っていて、その裏に小さくこれを描いたのは為信卿であると書かれていました。後白河の御顔を「天子摂関御影」と比べるとかなり似ているので為信のものと考えられています。

為信の子の豪信は「天子摂関御影」の摂関と大臣を担当しています。親子で分担して作ったということです。国宝「花園法皇像」も描いています。この豪信の後には、作品、文献史料ともに似絵の画家が活躍した形跡はなくなってしまうのですが、このように似絵の画系は平安時代の終わりから南北朝時代まで続き、天皇の肖像画や儀式、行事の記録、風景画や三十六歌仙など歌人の姿を描いたということが文献や史料からわかります。

どうして似絵の画系が鎌倉時代を中心に活躍したのかを考えると、やはり天皇の姿や儀式のありさまを後世に残していくという機運が非常に高まったからだと思われます。天皇の姿でいえば、大画面の絹本といった本格的な肖像画を作る時は、お手本をもとに、計画性のある構図で描いていくのですが、一方で似絵の作品はその場で姿を写したことが非常に重要で、後世の人たちにとっては由緒あるお手本として価値をもつのです。この「後鳥羽上皇像」はまさに目の前で描いたと伝えられる作品だからこそ国宝になっているわけです。似絵が鎌倉時代、目の前の人や特定の行事を描いていることが重要な意味をもってくるわけで、この作品が大事にしていかなければならないものだということがお分かりいただけるかと思います。

なぜ後鳥羽院は信実に自分の姿を描かせたのかということについてもいろんな解釈がありまして、やはり、お母様の七条院に出家前の姿を留めておき、それを渡したかったという人もいますし、承久の乱で負けたけれども、天皇としての矜持を失っていない自らの姿を残して後世の天皇たちに示したかったという人もおられます。歴史の文献ともあてはめていろいろ想像を巡らせていただきたいと思います。とにかく、後世たくさん作られた後鳥羽院の肖像画の、おそらく大元になった可能性の高い画像がこの作品です。今回は地元で身近に見ただけという貴重な機会だと思いますので、作品に親しんでいただければと思っております。ありがとうございました。

中でも和様を形作った人たちの遺したものを手本として使っているということです。

東京国立博物館蔵の国宝、藤原行成筆「白氏詩巻」は、伏見天皇がそばにおいて大事にしていたものです。そして、小野道風が屏風に揮毫した漢詩の下書き「屏風土代」を見ながら、伏見天皇の臨模したものが御物の「屏風土代臨模」です。行間の取り方や字の強弱をそのまま写し取っている事が分かります。伏見天皇は手習始から、古の名筆を一生懸命勉強することによって、歴代天皇の中でも1、2を争う字の上手い天皇として評価されるようになりました。どんな天皇であっても、書の技術を上達させていくには、幼いころからの手習始に始まり、それ以後欠かさず行った修練があるというのがわかりいただけると思います。

では、後鳥羽天皇の書は、どんな人の手本がバックグラウンドにあるのでしょうか。『入木抄』という南北朝時代の書道の指南書に「弘法大師から始まり、小野道風が登場して以降は道風の書風が一世を風靡し、その後を受けた藤原行成は、小野道風の書風に倣っているけれども、行成自身の個性を発揮している。その後、藤原忠通が現れてから、ことごとく藤原忠通の書風となり、後白河天皇以来、後嵯峨天皇の頃まで忠通の書は大変に珍重された。さらにこの藤原忠通の孫にあたる九条良経が受け継いだことで、忠通の書風はますます盛んとなって、後嵯峨天皇の頃まで藤原忠通の書風が一世を風靡した」と書かれています。

京都国立博物館が所蔵する国宝の「藤原忠通書状案」をみると、後鳥羽天皇の筆跡より線質は太いように見られますが、特徴として、墨の濃さ、起筆の強さ、線の強弱はかなり共通した部分が見られます。さらにその子の九条兼実も、藤原忠通の書風を色濃く受け継いでいます。藤原忠通により創始された書風が、子、孫にいたるまで色濃く受け継がれているというのがわかります。この時代に在位した高倉天皇、土御門天皇、後嵯峨天皇の手紙からも藤原忠通の書風の影響が色濃く表れています。総じて、後鳥羽天皇を含めたこの時代の天皇の書は、藤原忠通の影響が大変濃いということがいえますが、その影響だけで後鳥羽天皇が自身の書風を確立するのではなく、学問をすることによって生まれる天皇としての自覚が必要になってきます。天皇と学問について、順徳天皇の『禁秘抄』の中に「天皇が身につけなければならない第一は学問である、続けて学ばなければ古くからの道理に暗くなり、政治をなし得ることはできない」と記しています。

そうした学問について、天皇がどういう認識を持っていたのか、花園天皇の事例を挙げます。花園天皇は、歴代の天皇の中でも非常に好学の君主として有名です。花園天皇が真剣に学問に取り組むようになった年齢と、即位する年齢が非常に近いことから、学問は天皇にとっては世を治めるための道具で、花園天皇の中に世を統べる天皇としての自覚がこの年以降芽生えたことによって、学問に接する態度にも大きな変化が起こりました。さらに、それを書へ敷衍させて、古の能筆の人達を手本に日々修練に励んできた天皇に、いかにして個々の個性が加わるのかと言え、一番最後に申し上げた天皇としての自覚というのが、プラスアルファの要因となり得ると思います。後鳥羽天皇の場合であれば、藤原忠通に似ているけれどもまたそれとは違う、文字を見ると後鳥羽天皇だと認識できる独特の書風というのは、この天皇としての自覚があるからということになるのではないのでしょうか。

このような形で「形を見る」という試み、失敗したか成功したか、私としては心もとない部分もありますけれども、長時間にわたりご清聴どうもありがとうございました。